

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児②④

浅田 朋子

今年も双子の娘たちの長い夏休みが始まった。イタリアの小学生の夏休みは6月初旬から9月半ばまで、約3ヶ月もある。小学三年生の双子のクラスメイトたちは5月ごろから早々と夏休みの予定を楽しげに話していた。その横で浮かない顔の親たち。「あ～、どうしようかしら…。ねえ、どこのサマースクールにするの?」「うちは職場の近所にするわ。迎えに行くのが楽だし。でも、ちょっと高いよねえ…」日本と違いイタリアは小学生まで保護者の送迎が必須であり、ましてや家に一人で留守番をさせておくことはできない。共働きの親は、祖父母に預けるか、もしくはサマースクールに申し込むか、それはもう頭を悩ませる。サマースクールの費用も3ヶ月となると金銭的にも大変である。パオロのお母さんが双子に「今年の夏も日本に帰るの?」と聞くと「うん!」と嬉しそうに答えた。「いいわね～!日本に実家があるなんて!」と羨ましがられる。

私たちは毎年、夏休み2ヶ月を日本の祖父母宅で過ごし、1ヶ月をイタリアの海の家で祖父母たちと過ごしている。

日本での楽しい2ヶ月の滞在はいつもあっという間に過ぎ、帰国便に乗るために空港にいるのが信じられないような気分になる。日本からイタリアの復路便は、ようやくローマから東京・羽田行きの直行便が復活したITAエアウェイズ。まだ羽田空港で日本の地から離陸していないにもかかわらず、乗り混んだ途端、イタリア人CAたちの「ここは近所のバールか?」と思うような適当なサービ

スと軽い態度から醸し出される機内いっぱいの濃いイタリア色は、まるでもうイタリアに帰ってきたかのように感じる。離陸までの日本の余韻が、大声で話すCAたちの声で吹っ飛んでしまい「はああ…」とため息がでた。



【海水浴場】

巨大バール「ITA」は無事ローマに到着した。フィウミチーノ空港の到着ゲートを出ると、「Tesori!!! Piccoline mie!! Eccomi!! Nonno è qui!! (私の大切なおちびちゃんたち!! おじいちゃんはこちらだよ!!)」と大声で叫んでいる義父の姿。毎年恒例のシーンである。一緒に迎えにきた夫を押しわけ、警備員に「線より中に入らないで!」と言われても駆け寄ってきて双子に抱きつく。2ヶ月しか離れてないのに、この喜びよう。「大きくなったなあ!」とうっすらと目に涙を浮かべて双子にキスの嵐である。夫はというと大量の荷物を黙々とカートに乗せている。義父は私にも抱きつき「あれ、なんかちょっと背が伸びたか?」と聞いてくる。成

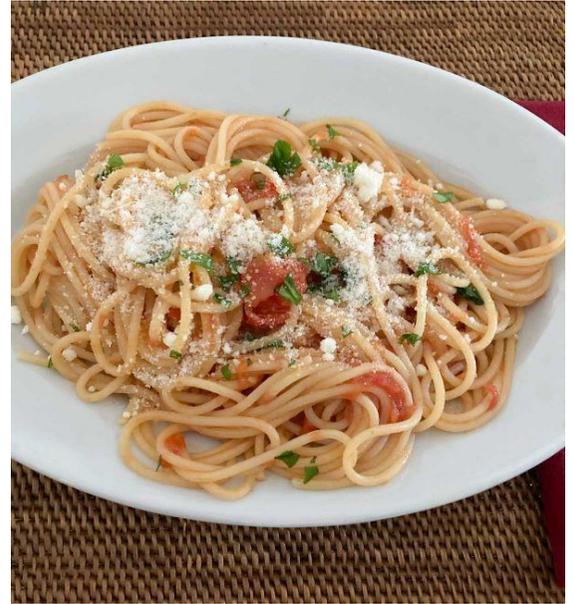
長期なんてとうの昔に終わっている 48 歳、そんなわけないやろ！「まあ、体重は増えたけどな・・・」という夫が苦笑いをした。

義父母宅に着くともう夜中の 12 時になっていた。いつも日本からイタリアに戻ると自宅には戻らず義父母宅に行く。迎えに来た夫もこの日は一緒に義父母宅に泊まるが、まだ仕事があるので海の家には義父と双子と私だけが一緒に行く。だからこの方が段取りも良いのである。義母は先に海の家に行っている。14 時間のフライト中、ほとんど何も食べなかった双子は小腹が減り「ノンノ、お腹減った」と言うと、義父は嬉しそうに「ちゃーんと買ったぞ、ピッツァ！」とオーブンからピッツァを出してきた。無言の双子。今は夜中の 12 時・・・。一人がこっそりと私に「ママ、私、そうめんとか食べたい・・・」と言った。うん、わかる、わかるよ！さっぱり、ツルツル～と喉越しのいい、軽いものを求めているんだよね・・・。そうめんはもちろん無理だが、とにかくピッツァではない。どちらかという今食べたくないものナンバーワンやな。でも、義父の嬉しそうにピッツァを温める姿を見ると何も言えず、双子も私もピッツァを齧った。ところが案外美味しく感じ「ああ、私もイタリアに馴染んできたのか・・・」と焦げたピッツァを見つめた。

次の日から、義父とさっそく海の家へ。義母も今か今かと心待ちにしていたので、双子と私をギュッと抱きしめた。「お昼は Pasta pomodoro e basilico (トマトとバジリコの Pasta) を作っておいたからね」と言った。この Pasta は生のトマトをオリーブオイルと玉ねぎで炒めバジリコで風味づけしてあるので、Pasta の中では一番あっさりしている。双子も小さい時から慣れ親しんだお気に入りの素朴な Pasta。さすが義母！昨日の夜中に義父が買って来たピッツァを食べた話をすると「あの人、何にもわかってないわね！好きだからって疲れている夜中にピッツァなんか食べられないでしょ・・・」とため息をついた。

双子はすぐに海に行きたがった。さすが 8 歳、長時間のフライトも時差もへっちゃらで元気である。義父は、私たちが日本から戻るまでに、遠浅で砂浜の綺麗な子供にぴったりの海水浴場を探してくれていた。双子はフルーツを持ってこの海水浴場へ行き、義父に泳ぎを教えてもらい、お昼は双子

の大好きな生ハムメロン、モッツアレッタ・チーズとトマトを食べ、少し夏休みの宿題をして、夜は義母の作る Pasta や polpette (肉団子) を食べ、毎日を楽しく過ごした。



【義母の作った Pasta pomodoro e basilico】

今はこんなに孫煩悩で甲斐甲斐しく世話をしている義父だが、義母の話では、特に幼少期、自分の子供(つまり私の夫)に対してあまり世話をしなかつたらしい。

義父母は共働きの会社員であった。義父は仕事以外でも家にいることは少なく、土日の休みも友達とテニスを楽しんだり夕食に行ったり自分の予定で忙しくしていて、子供の面倒はほとんど義母任せだったらしい。「私のお父さんは、土日の休みには必ず動物園や公園に連れて行ってくれたよ」と言うと「偉いわねえ・・・。あの人と大違い」とため息をついた。また、子供は保育園・幼稚園には通わせず、小学校に上がるまで日中は義母の両親にずっと預けていたそうだ。「なんで保育園や幼稚園に入れなかったん？」と聞くと義母がため息をついて「どれも合わなくて、結局行かせなかったのよね・・・」と言った。今は見る影もないが幼少の頃の夫は感受性が強く、周りの環境になかなか馴染めなかつたようだ。公立の幼稚園に連れて行くも 1 ヶ月で断念。2 カ所の私立保育園も数日しか持たなかつた。義母の同僚が「ここなら絶対大

丈夫！」と太鼓判を押した「モンテッソーリ教育法」を取り入れた幼稚園は、なんと1日でリタイヤ。過去の夫はどんなに問題児だったんだ…。3つ子の魂百までとは私の祖母がよく言っていたが、夫もこの有名なモンテッソーリ幼稚園での苦い出来事を今でも鮮明に覚えているようで「モンテッソーリ教育」に懐疑的だ。「1日行っただけで何がわかんねん」と言いたいのがトラウマになっているようなので言わない。しかも高額の入学金も払っていて、1ヶ月分の授業料もきっちり取られたらいい。こちらは義父母の苦い思い出である。

夫も小学生時代の長い夏休み、ローマから南へ車で2時間ほどの山間の町、アルピーノにある山の家で祖父母と過ごした。夫が私に写真を見せてくれたが、猟師が住んでいそうな石とレンガ造りの今にも「ガララッ」と崩れそうな家の前に、小学生の夫はなんともいえない哀愁漂う表情で佇んでいる。夏休みというキラキラした感じが全くない。「暗い写真やな…。ここで3ヶ月も、毎日何してたん？」夫は無表情で写真を指差し「見て、ここ」と言った。ポケーっと立っている夫の腰にはロープみたいなもので布袋がくくりつけられている。「何これ」「これね、カタツムリが入ってるんだ」「カタツムリ…？」雨上がりになるとそこら中にカタツムリが出てくるので、それを捕まえて食べていたらしい。「ノンナが好きでさ。ニンニクとオリーブオイルで炒めて食べるんだよ。僕は嫌いだから食べないけど…」写真の暗い表情に納得。「しかしこの広い山の中、ほかに何かないの、もうちょっと採るのが楽しい食べ物」「あるよ。More(黒イチゴ)、毎日採りに行ったなあ～」ああ、黒イチゴな…。ピーターラビットの絵本で出てくるやつ。まあ、これもちょっと寂しい感じやけど。Moreはおばあちゃんがジャムにしてくれて、こちらは「すごく美味しかった」らしい。

イタリアの夏でも「太陽いっぱい元気いっぱいバカンスだ！」とならない、こんなピーターラビットの人間版みたいな夏休みもあるんだな、と思った。夫は毎日、山を散策し食べ物を採り、身近にあるものを利用して手先の器用なおじいちゃんといろんな物を作った。夜にはカードゲームをし、昔話を聞いた。ローマの騒がしさから遠く離れ、自然以外何もない山の中では何も特別なことは起こら

ないが、祖父母に見守られ夫は夏休みの毎日を穏やかに過ごした。

夫の幼稚園がなかなか決まらなくて義父母が困っていた時、おじいちゃんは「そんなところに行かさなくていい。自分たちが預かるから心配するな」と言った。夫が小学生になっても学校やサッカークラブへの送り迎えをずっとしてくれた。夫の思い出は祖父母と過ごした日々でいっぱいである。

私も、祖父母ととても長い時間を一緒に過ごした。おじいちゃん、おばあちゃんの、親とは違う独特の落ち着いた雰囲気、何もかも受け止めてくれる安心感を今でも懐かしく思い出す。幼少期、祖父母に愛され一緒に過ごした時間は永遠に残る。長い夏休みを日本の祖父母、そしてイタリアの祖父母と過ごせる双子は幸せである。毎年、これからも同じようにこの「おきまり」の夏休みを繰り返してほしい。

過去にさかのぼり、イタリアと日本の祖父母の中で「子供の世話部門」最下位の義父。「だから今、双子の面倒を見てつじつま合わせているのよ、大いに世話してもらいなさい！」と義母は笑って双子を見つめた。



【食料品店に買い出しに来た義父】

(元当館語学受講生)

移動する〈わたしたち〉のおはなし

竹田 理乃

大学院でドイツのいろはを教えてくださいました先生が、私たち現生人類は賢い人間「ホモ・サピエンス」であり、遊ぶ人間「ホモ・ルーデンス」であるのに加えて、移動する人間「ホモ・なんだっけ……でもある」とおっしゃったとき、なんだか反射的にちよっぴりイヤな顔をしてしまった気まずさは覚えているのに、せっかくのラテン語の決めフレーズは思い出せないのはどうしたものか。絶対に捨てていないはずの授業ノートはいったどこに消えたのか。せっかくだから日本語から逆算してみようとチャレンジしないなんて、親切にも文法解説のプリントをたくさん作ってくださったラテン語の先生に申し訳ないと思わないのか。あーあ、学んだはずのことが身についていないのを実感してしまうと、気が滅入りますね。

あたりを改めて見まわしてみると、先生のおっしゃった通り人間というのは移動していくものだったようです。そもそも人類の故郷はアフリカだというのに、私という人間が日本に生を受けたのは、はるか昔にはるかな旅路を踏破して、山だらけで狭いながらも木はよく茂る、湿潤で暮らすに悪くなさそうなこの地域にやって来た人たちがいたからにほかなりません。ナザレのイエスはエルサレムを目指し、アレクサンドロス大王は東方へ進出。琅邪郡出身の諸葛亮孔明は死ぬまで五丈原から中原を睨んでいたし、ヴァイキングたちはグリーンランドからコンスタンティノーブルまであった活動範囲をさらに広げて、ソルフィン・カルルセヴニに率いられ新大陸アメリカのどこかにあったヴィンランドの土を踏んだのだとか。歴史の教科書を見直したら移動の記述でいっぱいです。そういえば私もイタリアに行きました。

わざわざユーラシア大陸の向こう側にまで出かけていく自分の行動を柵に上げて、人間は移動するものなんですよという言説にホンマですか〜と

身構えてしまったのはどうしてなのか。人間は移動しないものだと思っていた理由はなんなのか。今度は記憶を手繰って自分史を見直してみると、家庭の事情で引っ越すことになったのを泣いて嫌がった子ども時代のツライ心情の残滓と、新しい場所でもよ者として過ごすことのキツさに対する忌避感に引っかかっていたようです。

新天地に旅立つ人が必ずしも意気揚々として
いるわけではありません。

イタリアを代表する児童作家ジャンニ・ロダリーの作品にも、愛する土地を離れるときの悲痛な想いを詠った「移民の旅行かばん (la valigia dell'emigrante)」という作品があります。

Non è grossa, non è pesante
la valigia dell'emigrante...
C'è un po' di terra del mio villaggio
per non restare solo in viaggio...
Un vestito, un pane, un frutto,
e questo è tutto.
Ma il cuore no, non l'ho portato:
nella valigia non c'è entrato.
Troppa pena aveva a partire,
oltre il mare non vuol venire.
Lui resta, fedele come un cane,
nella terra che non mi dà pane:
un piccolo campo, proprio lassù...
ma il treno corre: non si vede più.

大きくはない、重くもない
移民の旅行かばんは…
わたしの村の土が少し入っている、
旅中ひとりにならないように…
服が一着、パンが一つ、果実が一個、
そしてこれでぜんぶ。
でも心はない、それは持ってこなかった:
旅行かばんに入らなかった。
離れる苦しみが大きすぎて、
海の向こうには来たがらない。
かれは待つ、犬みたいに忠実に、
わたしにパンをくれない土地で:
小さな畑が、ちょうどあの高みに

でも列車は走り:もう見えない

(*Filastrocche in cielo e in terra*, Torino, 1960)

心を引き裂くような苦痛に耐えて、なんとか暮らしを立てられる場所を探す旅に出た移民たちの姿は、ロダーリの作品にときどき現れます。

たとえば『間違いの本(*Il libro degli errori*)』に入っている「essere e avere」というお話は、移民が直面する言語の壁についてのおはなしです。だいたいみんな初級のクラスで悪戦苦闘する近過去を作るための essere と avere の使い分けは、イタリア語の基礎知識といえますが、幼くして働き始めなくては生きていけない移民たちにとっては、文法をきちんと学ぶ機会を得ることがそもそも難しいものです。この短編の主人公であるグラマティクス教授は、稼ぎ先のドイツやフランスから帰って来た移民たちと同じ列車に乗り合わせ、彼らの使う間違いだらけのイタリア語に腹を立てて、その場で即席のイタリア語講座を始めます。ところが、このおはなしで学びを得るのは、ものを教えるつもりで突っかかっていたグラマティクス教授の方でした。彼は文法的には間違いが多いながらも、自分の想いを伝えるために移民たちが使うことばの滋味に感化されて、ことば遊びに笑っていた読者を自ら立ち向かって解決すべき問題のある現実へと引き戻すような考察を行います。

このおはなしを読むと、外国人としてイタリア暮らしを始めた時期はもちろんのこと、関東から関西に引っ越したときに、非関西方言の特徴がある語彙やイントネーションの違いをおもしろがられてしまい、ちょっとした発言でまわりの人が大笑いをするようになって、私の発することばの内容に関心を払ってもらえなかった時期のキツさを思い出します。なかなか思っていることをことばにできず、親切にしてくださった大家さんに「私はイタリア語が上手に話せないで、まるでバカになったような気がする」と弱音を吐いて心配をかけたことがありましたが、その後わりと早めに立ち直れたのは、ことばを発するのが怖くなるという経験にある程度の免疫がついていたからだだったのかも。沈黙は金だとか、言わぬが花だとか、世の中には黙っておいた方がいいことも多いようですが、そ

んなのはコミュニケーションの奥義みたいなものだから格言として流布しているのでしょう。私のように出しゃばりなタイプ人間は、いきなり金を狙って大損するより、まずは雄弁の銀を目指して話し倒した方がうまく行くように思えます。

Gianni Rodari

IL LIBRO DEGLI ERRORI

disegni di Bruno Munari



【*Il libro degli errori* 表紙】

出典元: <https://100giannirodari.com/opera/il-libro-degli-errori/>

ことばの使い方を学ぶ機会の持てなかった人々を無教養だと蔑視することを否定し、ことばの内容に耳を傾けることを良しとしたロダーリは、ことばの使い方を学ぶ途上にある子どもたちの声もまた大切に扱いました。容易に邦訳の手に入る『羊飼いの指輪 ファンタジーの練習帳(*Tante storie per giocare*)』には、子どもたちと語らうなかで飛び出してきたアイデアを膨らませて作られたおはなしの数々が収められています。これらは子ども向けラジオ番組のなかでのロダーリと子どもたちのブレインストーミングが元になっていて、その時のことは物語創作の手引きとして定評のある『ファンタジーの文法』にも語られています。子どもたちの持つどのような価値観や発想が、どのようにおはなしに反映されているのかなどの解

説があり、ぜひ小説作品と併せて読みたい本になっています。

ロダーリの回想によると、ラジオ番組に登場した子どもたちの年齢は6歳から9歳まで。私なんかは慣れがありませんが、たまに友だちの子どもと遊ばせてもらうことになって幼稚園児や小学生と接すると、あっという間にタジタジになって疲れてしまい、どこまでちゃんと聞けばいいのか、こちらの基準で勝手に情報の取捨選択を始めてしまいそうになりますが、ロダーリのように上手くやれたらお互いにおもしろくお喋りできるのではないかと期待が湧いて踏みとどまれます。不思議なものというか、当然のことというか、こちらが期待を見せてマジメに聞いていれば、子どもたちも一生懸命に考えを伝えようとしてくれる(ことが多いように思われる)ので、だんだん相互理解が進み、最後には「また遊ぼうね」と約束してもらえ(ることも)あります。

子どもたちの前で、うっかり「なに言ってるのかわからないんだから、どうせたいしたこと言っていないでしょ」とでも言いたげな態度を出してしまったらと思うと、いつも背筋が冷えます。これから成長して、やがてはあちらこちらへ移動を始めることになる子どもたちのことを想えば、今はできるだけ「私の考えることはことばにして伝えられる」という自信を持って、のびやかに学んで欲しい気持ちでいっぱいです。

いつか子どもたちが新天地を目指すことになったとき、離別に胸が張り裂けそうになっても、言語を含む知識の習得が間に合っていないなくても、自分の考えていることをことばにして伝えようという気概を持つことができているならば、共通点のある経験を持つ仲間と語らって心を軽くしたり、グラマティクス教授のように耳を傾ける力を持つ人を味方につけたりできるはず。この世界がどういう風になっていて、自分はどんな存在なのか、ことばを使って身の回りのものごとを把握しようとする子どもたちの背を押すロダーリの眼差しは、同じくことばを使って異文化を把握していこうと試みる言語学習者にも、温かく感じられます。

<参考文献>

Filastrocche in cielo e in terra, Torino, 1960, Einaudi

Il libro degli errori, Torino, 1964, Einaudi

『羊飼いの指輪 ファンタジーの練習帳』 関口英子訳 光文社 2011年

『ファンタジーの文法』 窪田富男訳 筑摩書房 1990年

(元当館語学講師)

～会館だより～

<秋の無料体験レッスン>

10月からの秋学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。この機会にぜひ新たな世界への扉を開けてみましょう！

●イタリア語無料体験(初心者向け)

京都本校: 10月3日(火)11:00
10月7日(土)11:00

四条烏丸: 10月2日(月)19:00

大阪梅田校: 10月3日(火)19:00
10月4日(水)11:00

●イタリア語無料カウンセリング(経験者向け)

京都本校: 10月7日(土)14:30～

●スペイン語無料体験(初心者向け)

京都本校: 10月2日(月)10:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>